

中学校英語科における帯活動を取り入れた授業づくり —確実な学習内容の定着を目指して—

和歌山市立貴志中学校
教諭 前田 貴俊

【要旨】

本研究では、中学校英語科において、確実な学習内容の定着を目指した指導の手立てとして、帯活動を取り入れた授業を提案した。具体的には、フラッシュ型教材、高速インプット、英文を書く活動を毎授業で取り組む単元構想を行った。また、各時間において習得したことを確認する振り返りを行い、生徒が学習した内容が定着したかどうかを知ることができる授業づくりに取り組んだ。単元構想に沿って授業を行い、取組を継続していくことで生徒を意欲的に学習活動へ取り組ませることができた。

【キーワード】

帯活動、フラッシュ型教材、高速インプット、英文を書く活動

1 研究のねらい

筆者のこれまでの授業では、教科書の単語と基本文の定着を目指して、繰り返し復習の活動を取り入れることを意識してきた。しかしながら、筆者から生徒への説明も多く、生徒がインプットしたことをアウトプットする機会を十分に設定できていなかった。そのため、単語や基本文を確実に定着させることができていなかった。また、基本文を用いて英文を書かせるときには、生徒に学習した文法を使って書くように指示をするだけであった。英文を書く上で重要な単語や語順など、基礎的な知識が定着していない生徒は、「書いてみたい」という動機が生まれず、書くことに対して苦手意識を持つ生徒への手立てをとることができていなかった。

新中学校学習指導要領解説外国語編では、「実際のコミュニケーションにおいて活用される可能性が高いと思われる語彙の定着を図る(※1)」ために、3年間で指導する語は、現行の1200語程度から1600～1800語程度へ、約400語～600語増加し、より確実な定着が必要とされている。また「文構造や文法事項を正しく用いて正しい語順で文を構成すること(※2)」に留意することが求められており、語順の確実な定着も必要であると述べられている。一方で「『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないこと(中略)などの課題がある。(※3)」としていることもあり、筆者の抱える課題とも共通するところである。そこで、単語と基本文の語順の定着と基本文を用いた英文を書く活動を確実に行う帯活動を取り入れる。そうすることにより、アウトプットの機会を増やし、授業時間内に学習内容を確実に定着させることを目指して、研究を進めることとする。

2 研究の方法

研究を進めるにあたって、単語の定着についてはフラッシュ型教材を用いて、語順の定着については高速インプットを用いて取り組むこととした。また、基本文を用いた英文を書く活動を確実にを行い、アウトプットの機会を増やすためにこれらの取組を帯活動として提案授業を実施する。

(1) フラッシュ型教材による単語の指導

単語の指導については、フラッシュ型教材を活用する。フラッシュ型教材とは、課題を瞬時に次々と提示させるデジタル教材のことで、その活用により生徒は短時間で変化に富んだ繰り返し学習を行うことができ、繰り返して継続的に学ぶことで単語の定着に有効である。本研究では、デジタル教科書のフラッシュ型教材とプレゼンテーションソフトを用

いて筆者が作成したフラッシュ型教材の両方を活用した。その活用方法を以下に述べる。

ア デジタル教科書のフラッシュ型教材

デジタル教科書のフラッシュ型教材を新出語句の導入で活用する。電子黒板に単語のつづりと意味を表示し、ネイティブの発音を電子黒板のスピーカーから聞かせることができる。また、既存の教材を使用するため、作成の負担を軽減できるという利点がある。授業では、単語の読み方と日本語の意味を一つ一つ確認し、発音練習を行う。

イ プレゼンテーションソフトを用いて作成したフラッシュ型教材

既習単語の復習では、プレゼンテーションソフトを用いて筆者が作成したフラッシュ型教材を活用する。この教材を活用することで、新出語句を導入した時の生徒の理解度に合わせて、工夫を加えることができる。具体的な工夫としては、単語のつづりと意味、イラストや写真などを表示することで、生徒が視覚的に情報を得られ、理解しやすいようにする。スライドを自由に組み合わせて、変化のある繰り返しを行うことで、既習単語の定着を目指す(図1)。さらに、アウトプットの機会として、フラッシュ型教材で学習した後で単語を書く時間を設定し、より確実な定着を目指す。


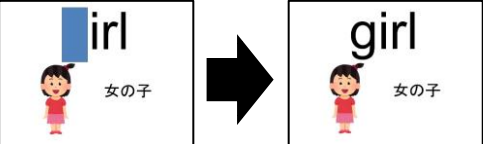
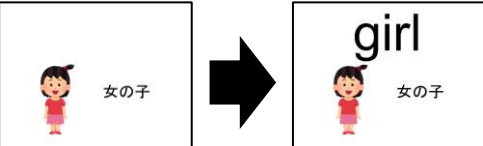
<p>1回目・・・既習語句の確認</p> 	<p>単語のつづり、単語の意味、単語のイラストや写真が見えるスライドを使用する。</p>
<p>2回目・・・1文字隠して確認</p> 	<p>単語のつづりの1文字、例えば girl であれば g の文字を隠したスライドを作成して、その隠したアルファベットを答えさせ、答え合わせと発音練習を行う。</p>
<p>3回目・・・すべて隠して確認</p> 	<p>日本語とイラストや写真のみにして単語を答えさせ、その後で答え合わせと発音練習を行う。</p>

図1 プレゼンテーションソフトを用いて作成したフラッシュ型教材

(2) 高速インプットによる語順の指導

語順の指導については、高速インプットに取り組む。高速インプットとは与えられた時間内にペアで、できるだけ速く英語で相手に質問し、相手の質問に答える活動のことである。学習活動の流れは表1の通りである。なお、ワークシートについては和歌山県教育委員会のもの(注1)を参考に筆者が作成し(表2)、使用する。

表1 高速インプットの学習活動の流れ

- ① ペアをつくって、質問者と回答者に分かれて、お互いのワークシートを交換する。
- ② 制限時間内に質問者がワークシートの質問文を音読し、回答者は、質問文にできるだけ速く答える。
- ③ 回答者が正しく回答できたら、質問者はチェック欄に「チェックマーク」を記入する。時間は、指導者が計る。
- ④ 質問者と回答者が交代して、②と③を行う。

高速インプットで期待される効果は、英語で尋ねられたことに、素早く反応する能力が身に付くことや、既習の文法事項の復習になること、英語の語順に慣れ、表現の能力の向上につながるなどが挙げられる。回数を重ねるごとにスピードが増し、シートのチェック欄のチェックマークの数が増えていくので、生徒が自身の学習の成果を実感することができ、学習意欲の向上も期待することができる。

田地野(2011)は「意味の伝わらない誤りを『グローバルエラー(全体的な誤り:大きな間違い)』、ある程度意味の通じる誤りを『ローカルエラー(局所的な誤り:小さな間違い)』」(※4)としている。「語順の間違いは、この『大きな間違い』の代表格」ともしており、「ローカルエラー」よりも「グローバルエラー」をしないように、高速インプットを日々の帯活動として繰り返し取り組むことで、生徒に語順を意識しなくても、自然と身に付く指導を行う。

内容については、取り組む時間を変えずに、学習した基本文をひとつずつ増やしていくことで、難易度を上げていく。また、指導者が質問文と回答文をあらかじめ決めておくことで、生徒が英文を繰り返し練習することに集中できるようにする。

(3) 英文を書く活動

根岸(2017)は「アウトプットは、年に1, 2回の大きなアウトプットだけでなく、小さなスピーキング活動、小さなライティング活動を継続的に盛り込んでいくことが効果的である」(※5)としていることから、ふり返りの帯活動として、授業の最後に毎時間英文を書いて、学習内容が定着したかを知ることができる時間を設定した。

また、田中ら(2008)は、自己表現意欲を高める工夫(表3)として、学習課題において、「必然性を高める」、「具体性を高める」、「自己関連性を高める」、「自由度を高める」の4つを工夫として挙げている。自己表現意欲を高める工夫のうち、ひとつを取り入れて英文を書かせる。本研究においては、基本文を用いた、自己関連性を高める課題を設定する。生徒が身近に感じる内容を取り扱うことで、興味をもって英文を書く活動に取り組むことができるようにする。

ワークシート(図2)により、新出の文法を使った英文を帯活動として毎時間書かせる。新出文法を学習した時間では、3文、その次の時間には4文で書く活動を行い、難易度を引き上げる構成にする。さらに、会話文形式にすることで書いた後に生徒がペアで会話の練習ができるようにする。

表2 筆者作成の高速インプットワークシート

高速インプットワークシート Unit7⑥			
Class() No() Name()		Date	
(Greeting each other) Good morning. / Good afternoon.		10	29
Questions	Answers	Check	Check
1 What is your favorite subject?	My favorite subject is English.	✓	
2 How many CDs do you have?	I have ten CDs.	✓	
3 What does Mr.Maeda like?	He likes ramen.	✓	
4 Who is that man?	He is Ichiro.	✓	
5 What time is it?	It is ten thirty.	✓	
6 Which do you like, sushi or tempura?	I like sushi.	✓	
(Greeting each other) Thank you.		Let's count!⇒	
Your partner's signature		Maeda	

表3 自己表現意欲を高める工夫

必然性を高める	生徒がいよいよ英語で表現させられるのではなく、自ら英語で表現したいと思わせる状況をつくること
具体性を高める	生徒が行う活動を教師が生徒の立場に立って活動の導入や説明を行うこと
自己関連性を高める	例文や、活動に登場する地名や人物などを生徒が身近に感じるものにする
自由度を高める	答えが一つではなく、生徒自身の意志や判断によって主体的に表現させる部分を活動に取り入れること

※田中ら(2008)を参考に筆者作成


テーマ【どちらかをたずねる文を書いて、その答えとその説明を3文で書こう】

【Example】

Which do you like, soccer or baseball?

I like baseball.

I am a member of the baseball team. / I play it after school.



【Your turn! Let's try!】(イラストは文章を書いてから描こう。言葉でもいいですよ。)

例文を参考にしながら、小さなライティング活動として毎時間書かせる(根岸)

イラストや言葉で自分の好きなものを書かせることで自己関連性を高める(田中ら)

図2 筆者作成の英作文ワークシート

3 所属校における提案授業について

所属校の第1学年のうち3学級を対象に、New Horizon English Course1 (東京書籍)のUnit7「ブラジルから来たサッカーコーチ」(扱う内容は疑問詞who, what time, which)において、各学級で6時間の提案授業を実施した。単元構想(図3)については、第1・3・5時では新出の文法に慣れる、第2・4・6時では前時に学習した文法を用いて、本文を理解するとい

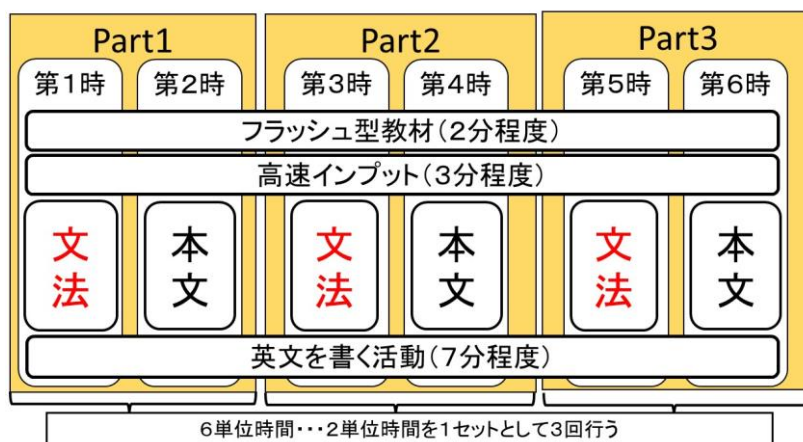


図3 単元構想

うように共通した枠組みとし、生徒が授業の展開に対して見通しを持てるように工夫した。フラッシュ型教材、高速インプット、英文を書く活動については、帯活動として毎時間必ず取り組んだ。単元の中に帯活動を取り入れることで、インプット中心の授業展開から、学んだことをアウトプットする展開とし、学習内容の定着を目指した。また、提案授業における生徒の様子や変化を見るために、アンケートを実施した。

4 成果と課題

2 研究の方法で示した3つの取組について、成果物とアンケート結果、および授業者の見取りから、成果と課題について述べる。

(1) フラッシュ型教材による単語の指導

単語の指導についての成果は、単語を覚えようという生徒の意識を向上させ、学習に意欲的に取り組ませることができたことである。アンケートにおける生徒の自由記述では以下のような肯定的な意見(表4)があった。このことから、フラッシュ型教材を使用し、最初は全ての文字を見せて、その次は文字の一部を隠して難易度を変えたことや、日本語と英語、絵などの複数の情報を取り入れたこと、学習した後に覚えた単語を書かせたりするなどしたこと、変化のある繰り返しを通して最後にアウトプットする機会を設定したことにより効果があったと考えられる。

課題は、アウトプットさせる単語数が多かったことである。フラッシュ型教材で学習した後で書かせる単語数について、生徒の習熟の度合いや実情を見定めながら、配慮をすることが必要である。

表4 フラッシュ型教材についてのアンケートの一部

<p>【肯定的な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・覚えようと意識して見て読んだり、どの文字がぬけているかを答えたりしたから単語を覚えることができた。 ・一部分の文字を消されることによって、より覚えやすくなる。 ・日本語と英語を交互に出してくれるから、1つ1つの単語の意味をしっかりと理解できた。 ・(フラッシュで電子黒板に表示するものは)英語(の単語)だけでもよいが、絵があったほうがわかりやすく覚えやすい。 ・後で全部暗記して書かなくちゃいけないと思うと必死になって覚えようとするから。 <p>【否定的な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(フラッシュカードに登場した単語を学習したあとで、その単語を)一度に書かされたからかけなかった。
--

(2) 高速インプットによる語順の指導

語順の指導についての成果は、高速インプットにより語順に慣れさせ、定着させることに対して一定の効果があつたと考えられることである。アンケートにおける生徒の自由記述で、以下のような肯定的な意見(表5)があつた。このことから、繰り返し声に出して読むことにより、また、帯活動として取り組むことにより、ワークシートがなくても語順を間違えずに英文を読めるようになった生徒や、「読み」が定着した英文を「書く」際に、読んだ英文と同じになるように意識しながら書いていた生徒もいたことから判断することができる。

課題は、高速インプットの活動の意義を十分に生徒に理解させることができていなかったことである。そのため、ただ速く読めば良いという活動となつてしまい、生徒が英文を定着することよりも速く読むことを意識し過ぎてしまった。また、高速インプットに出てきた英文を基に、即興で話すことができるような工夫も足りなかった。

表5 高速インプットについてのアンケートの一部

<p>【肯定的な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何回もくりかえすことで覚えられた。 ・毎日やっていたから少しずつ覚えてきた。 <p>【否定的な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・読むだけではなかなか身につかなかつた。文を理解するよりもただ速く読もうとするから。 ・高速インプットに出てきた英文しか覚えていない。

(3) 英文を書く活動

英文を書く活動についての成果は、ワークシートに生徒が参考にすることができる例文を載せるなどの工夫をすることで、英文を書くことに対して苦手意識を持つ生徒も少しずつ書くことができるようになってきたことである。帯活動により継続して書くことや、例文を参考にしながら書くことが自分の力で書くことにつながつたと考えられる。また、英文を書く活動に自己関連性を高める工夫を取り入れた課題を設定することにより、自分の好きなスポーツや食べ物などについて書いている生徒(図4)や、英文を書きやすくなった生徒も見られた。

表6 英作文ワークシートについてのアンケートの一部

<p>【肯定的な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前までは自分で毎時間英文を書くことがなかつたから難しかったけど、自分の力がついた気がした。 ・見本があつて書きやすく、毎時間するから覚えている。 ・だんだん長い文が書けるようになった。

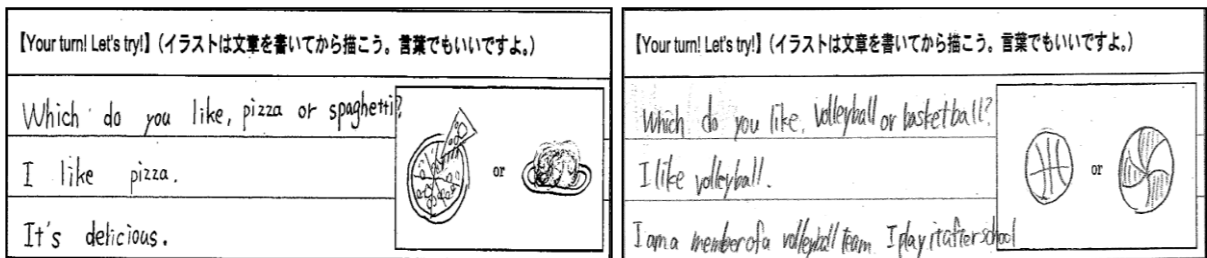


図4 自己関連性を高める工夫を取り入れた英文を書く活動における生徒の作文

課題としては、以下のことが挙げられる。英文を書く活動において、今回研究授業で学習した英文である「What time is it?」「It is ... o'clock.」「Who is ...?」を書く問題が2学期末の定期テスト(図5・6)に出題された。この採点結果を、誤りが全くないように書いているものを○(満点)、ピリオドやクエスチョンマークなどの記号がないものや、必要がない冠詞が付いているといった軽微な誤り、いわゆるローカルエラーを含むものを△(部

分点), どれにも該当しないものを×(無得点または無解答)として採点結果を集計し, 表7のような結果を得た。「What time is it?」を書く問題では, 1割の生徒が無得点または無解答だったが, 「It is ... o'clock.」や「Who is ...?」を書く問題ではそれぞれ約3割の生徒が無得点または無解答という結果であった。

表7 定期テスト結果集計 (n=87)

	○	△	×
What time is it?	64%	25%	10%
It is ... o'clock.	52%	16%	32%
Who is ... ?	63%	10%	26%

いずれの問題も提案授業の帯活動で取り組んだ英作文ワークシートにはほとんどの生徒が書くことができていたが, 定期テストの記述には必ずしも結びつかなかった。ワークシートにほとんどの生徒が英文を書けていたため, 定着していると考えていたが, 約1ヶ月後の定期テストの結果からは定着しているとは言いがたいことがわかる。このことから, 繰り返し学習内容を定着させる活動が大切であるということに改めて感じた。

今回の研究においては自己表現意欲を高める工夫(表3)のうち, 「自己関連性を高める」工夫に注目してワークシートを作成したが, それ以外の「必然性を高める」, 「具体性を高める」, 「自由度を高める」といった他の工夫を取り入れるなどの手立てを考える必要がある。

提案授業では帯活動として英文を書く活動を取り入れ, 自己表現意欲を高めて, 生徒が書きたいと思える課題設定を行った。しかし, 英文を書く活動が他の言語活動と独立していた。書きたいと思える課題設定も大切であるが, いきなり英文を書かせるのではなく, 話したり, 聞いたりした英文を実際に文章として書いてみたり, 読んだり, 聞いたりした英文について自分の意見を書いたりするなど, 複数の領域を統合した言語活動を行うことでより強く「書きたい」と感じ, さらに取り組みやすい課題を設定できるのではないかと考える。

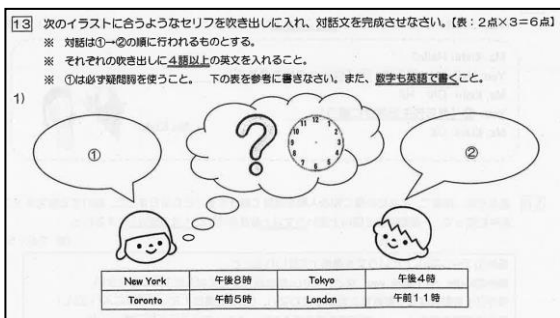


図5 時刻をたずねる問題と答える問題

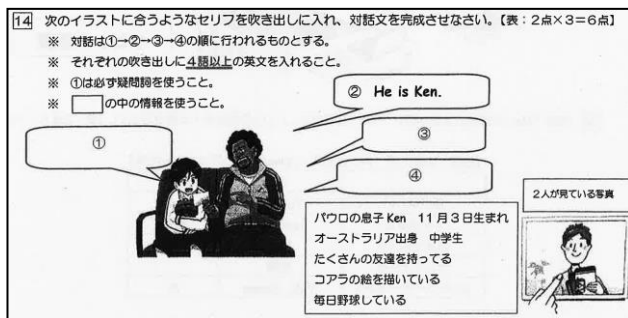


図6 だれであるかをたずねる問題

5 今後の取組について

本研究では, フラッシュ型教材による単語の指導, 高速インプットによる語順の指導, 基本文を用いた英文を書く活動を, 帯活動として授業に取り入れてきた。これらの取組により, 確実な学習内容の定着を目指してきたが, 研究を通して筆者が課題と考える点及び今後取り組むべきことについて述べる。

1つ目は, 単語の指導において, 変化のある繰り返しによる帯活動で学習内容の定着を図ったが, 2単位時間を1セットとして展開したため, 前の授業時間で学習した新出単語は後の授業時間にしか復習する機会を設定することができなかった。つまり, その新出単語を繰り返し復習する機会を十分に設定できなかったことである。

このことに対して取り組むべきことは, 学習内容の繰り返しをセット内で完結させず, 単元計画を見通して帯活動を設定し, 継続的に繰り返して復習する機会を設定することである。授業が進んでいけばいくほど, 復習すべき内容が増えていくが, あらかじめ単元計画を見通して, 定期テストの結果等を確認するなどして学習内容を精選しながら, 取り組む必要がある。

2つ目は, 帯活動を導入したことで単語や語順などの基礎的な知識をアウトプットする活動を毎時間設定することはできたが, それらの知識を実際に活用する学習活動がある課

題を設定できていなかったことである。

このことに対して取り組むべきことは、単元末にこれまでの既習事項を総動員することでたどり着けるような課題、つまりパフォーマンス課題によって、あらためて学習したことを再確認し、活用する場面を設定することである。帯活動を導入したことで、これまで基礎的・基本的な知識・技能を定着させるための学習活動にかけていた時間を短縮することができる。単元計画を通して、帯活動によりできた時間の余裕を活用することによってパフォーマンス課題に取り組ませるようにし、その課題を乗り越えることで、習得した知識・技能を用いて思考力・判断力・表現力の育成を目指していきたいと考える。

表 8 所属校における 1 年生の Can-do リスト

	言語材料	話すこと(発表)	話すこと(会話)	書くこと	聞くこと	読むこと
1年前半	be動詞, 一般動詞, 疑問詞	初歩的な語彙や表現を用いて自己紹介ができる。	初歩的な語彙や表現を用いて相手のことについて尋ねたり自分について答えたりすることができる。	自分の好きなことや自己紹介などを、3文以上で書くことができる。自分の一日の生活を3文以上で書くことができる。	短い初歩的な表現を繰り返し用いた表現を聞き取ることができる(自己紹介, 交通情報, 一日の生活など)。	初歩的な語彙や表現で書かれた英文を読んで、そこに書かれている内容の主なものを読み取ることができる(友達の自己紹介や, 学校紹介など)。
1年後半	一般動詞3人称単数現在形, 一般動詞過去形, 助動詞	初歩的な語彙や表現で自分の一日の生活をみんなの前で発表できる。 初歩的な語彙や表現を用いて体験したことをみんなの前で発表できる。	自分の家族や友達, 身の回りのことを伝えることができる。 初歩的な語彙や表現を用いて体験したことを簡単な会話でやり取りすることができる。	旅行や思い出について, 自分がしたことや見たこと, 感想などを3文以上で書くことができる。 初歩的な語彙や表現を用いて, 自身の体験したことなどを英文のルールに従って3文以上で書くことができる。	初歩的な語彙や表現で話されている内容を聞いて, 主な内容, 情報を聞き取ることができる(CM, 友達の思い出のスピーチなど)。	初歩的な語彙や表現で書かれた英文を読んで, そこに書かれている内容を読み取ることができる。場面の変化や登場人物の心情などを読み取ることができる。

また、各時間の学習課題や単元末のパフォーマンス課題を設定していくに当たっては、所属校での Can-do リスト(表 8)との関連をもたせていきたい。所属校が作成した Can-do リストの 1 年前半の書くことでは「自分の好きなことや自己紹介などを、3 文以上で書くことができる。自分の一日の生活を 3 文以上で書くことができる。」、1 年後半の書くことでは「旅行や思い出について、自分がしたことや見たこと、感想などを 3 文以上で書くことができる。初歩的な語彙や表現を用いて、自身の体験したことなどを英文のルールに従って 3 文以上で書くことができる。」としている。例文を参考にして指定された構成で書くことにより、初歩的な語彙や表現などの学習内容を確実に定着させ、自分で英文を書くことができるようにするなどの取組へとつなげていきたいと考える。そのために Can-do リストに基づき、各学年においてどのような力が求められているのかを把握したうえで単元計画を作成していきたい。

今後も引き続き授業改善に取り組み、学習内容を帯活動で確実に定着させた後に、学習した語彙や表現等を実際に活用することができるパフォーマンス課題等を設定し、指導の充実を目指して研究を続けていきたい。

<注釈>

注 1 高速インプットで使用したワークシートについては、http://www.wakayama-edc.big-u.jp/jh_gaikokugo/jh_gaikokugo2.html を参考にした。

<引用文献等>

※ 1 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』p. 32(2017)

※ 2 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』p. 25(2017)

※ 3 文部科学省『中学校学習指導要領解説外国語編』p. 6(2017)

※ 4 田地野彰『意味順英作文のすすめ』岩波ジュニア新書 pp. 25-26(2011)

※ 5 根岸雅史「英語力を伸ばしている学校の要因を探る」『英語教育 2017 年 8 月号』大修館書店 p. 34(2017)

<参考文献>

- ・大井恭子・松井孝志・田畑光義『パラグラフ・ライティング指導入門: 中高での効果的なライティング指導のために』大修館書店(2008)
- ・田中武夫・田中知聡『自己表現活動を取り入れた英語授業』大修館書店(2008)